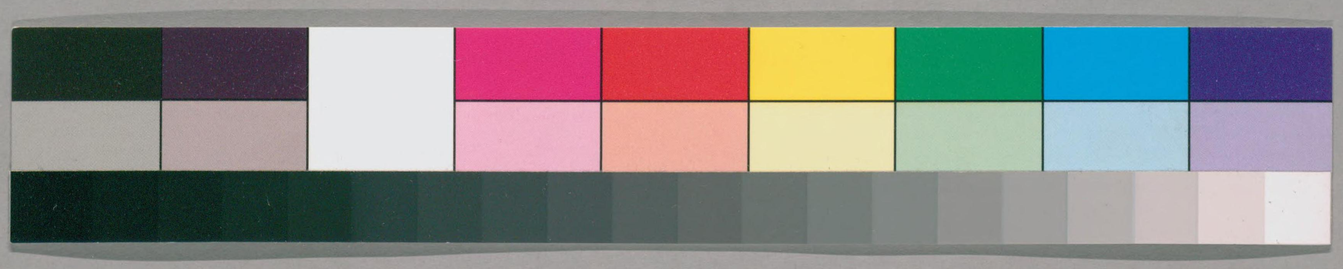

117
105
2

東京圖書館
和書門
架三ノ函
號二ノ三ノ冊

# 丹鶴叢書

風巢和歌集自十六至十八

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

# 風葉和歌集巻第十六

雑一

故柿原芳楚納本
柿原家蔵

ありあけの月をまちいでてながむれば
ふかくもすめるさよのなかやま

ありあけの月のあかきにおきいでて
ものおもふころのあきのよぞうき

ありあけの月をながめてあかすかな
いつのまにかはあきのきぬらん

をさく　おまのもほものたをる
あくまるくつもよそもる谷のそうふるに堂の春をたくる
半ふしらひ　そうふるひのたのかた
牧るねもつかそ神の梅そそ
内大臣のそれそは一条流のみ梅もとそを云へ
さそぬそんそ人のりをそうせ
いそそそそそのの女流
堂も春やむりそ恋るおよおれ神をそそのふるさて
たねふおそまけるむまりけるむ内大臣の入る玉そ
のひくのそみ

人一をめぐらさゝるもたゝせ給ふ
立給ふむろこといふ所より
きこえく　すまひの法度亮
のこと移ることやうやう云ふもむかしもおなじことなれど
御位のとき女院の一条院のさうの院御
させ給ひける　いそぎ
思ひきやさゝぬ月のかゝることをこそ
ゆ御ふところ(ら一本)のうちにかきいだきまゐらせさせ給ひける
女院
涙のこ雲のとちふふ(よ一本)ましひむのもこゝろよりの月前





前坊うちひくしをさせ給ふ
ける　水のもと
手をくゝのとふてこせやのこふかゝる
御子のこやこゝちくさいそさせ給ふ
出給ふの給はせける
よそのやうの
詮もこゝろ得ぬ事ぞ御子ども
世をそむこと思ひまうけ給ふ
女房よりおくり
二その私の中納言

ふしもるふのまつちの月影もまた
中納言すけつねの
こひつつもぬるよしもなくあけぬれば
くるるふゆまちくるるものかは
吹上上
さくらもみちもわれもおもはぬ
うつせみのさくらおもはぬ
ちりのなもいのふとうつんこころをもちひとつ
ちりのなもいのふとうつんこころをもちひとつ



弁内侍
うつろふをさくらのさかりとおもへども
ふるもあらしの春のなかめは
やまさとのふるさとびたるこころのぬまの月影
いのちしらるるの雲よりもあはれそのそらの空をこころ
まいりて
おなじ
たらちねのかかるをのをもとめむ
さまざまにつきせぬ思ひのこもるかな
おもひつつのわかをは乃

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

拾百首合六十七番

もの
ちぐさ
ちどりのうせぐのちどり
あぢ
ものごと
山
帚木
山
源氏の名の列の矢
一のもる女のもとふたちのいそぢを人
のもよぎつつけり



夜の
人
あて
ころ
ぐよませ
あて
旦
ものごと
いつ
たのおぼいまぢち矢

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

社ゆ〻しくもあるかな
ときふ称の天（本）のむくたち
あまもの風よもむくもろ〳〵
ろ〳〵のうの神く

小舟のあま

手習
ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵

前栽のあふおろ〳〵のろ〳〵
しのふく
ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵





この歌一
中納言
あさうろ〳〵日かまもあるまもあるまを
人をりくしくなろ〳〵
の風なもろ〳〵
ままれ私の中納言
まろあろかあるまふるのろ〳〵
うちの中天のもふくあの
あるりあろ〳〵
ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵

宿木
拾百哥合十番
ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵ろ〳〵

おもてに女さまく〳〵こと侍るをとまりてこゝろみ
くるふむしのこゝろおもそのよを秋はゆめそとも
神ぬ〳〵人なる故とに

拾百哥合七十一番

尚侍をゝゝめく〳〵文ともこゝろ〳〵にてもとひやら
こゝろをとゝゝ

俊蔭一

うつゝのさとに
風ふきそこゝろもむの秋よ我もおもふる宿とそく
まいし〳〵 あもとの大君
あるむのまもふたゝ秋もあまりぬる



夕霧をゝとまりて侍るを柏木の権大
納言まく〳〵もてあそひ侍るに笛をおく
ものふしゝまゝ侍るに我もあく侍て
ゝまゝて 一条御息所

横笛

拾百哥合六十公番

さゝのこふ秋風楽をむきて侍るに女
女御のこゝろあるに人の袖もぬるゝまて
きゝわけるこの一 烟の
秋風のふくゝれものむの秋なもつるもとふ
秋のゝもの(二本)さゝのこをむきて侍るとゝてさ

しもおくふすもちそまきらと
実定の女侍従が私家集の女院
まきらぬ杉ふく風のこゑふきに秋ぞ
世をそむくとふしまちてぬるふ
夕のそらをおもひいでつつ
山ふかみ友まつ風もさそはねば
父俊成の女の法の師匠なの
もしうき
あさぢふのうらの浦なみ
うちのぬの
ゆふぐれ
ぎをんの小方



あさぢふに風ふきそふる下もみぢ
散るのはふしまちがほなる
ふしまちがほなる
ふしまちがほなる

まもひく　あさちこなるの女家院ぢの
こるまにおもふらん秋の月をみのみかくちるこも
八月十五夜つ移りもくまるさよ求んてこの
よ我そむきこまろんもりくおほつのあるらんほくん
らまてく
空よすまそいまこの山のふもとふくこそこころむ
うまま本の植大納言のをみまくちくる恋をおもひわ
まくてくるつくふこは八月のこやわみのお
もてをおこまふすまもりくふ
久さちのたれ



ふくのうすまそぬ沈ふもりやもる秋のよの月
をここもるもふ月をくよのふるふさまる
とのこくふる　おまのもこの中文彩宇桐
をかる我宮の秋てつくまてこ月をおよそるお宝を
出るのち月をてどくつくる
おふるー大伴家
まこのやうぬ友ともむまぬ秋を月やたくん
ものこくろあのうちちうくあるまて月を
みおうく　おふまくまを添大納言家、
くまにみつよるうの景とおもまう、



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

おもしろき事もやとてかくなん

かくとあてておるくもるき学ふのとふすまるその月ふ

うつゝ　たたた弁女

まこのふる月の新ふふあうわをいうき学といて我すこさまし

女院もまくいせおそ

有明のつきのことのうく

まちのある月のそのおそくまこをの杜そのひなくさ

女二のこと承安度まそ

をくせふくく寒ふまし

とて



つくてをるくもふうみをふこのふ

中ふちふおそまけるろよう信ふる

よそのふくの井文宣旨

おのつくふまも社ぬまをうちふの杜の神ふふ

むすめのもとふくおくまし

まのたのこれふまくこの四一

ふやそのまアつのふの少方

ふくふおそせ称もをまし

こうふおそまけるふよう月のすむ

ふのそちるほれふくせのこそる



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

清少納言

松風
えぞしまのそよちどころなのるなる
女のもしほたれつつなげくころかな

うきてつらきをいかにせましと
小倉山ふもとの秋のもみぢをもつらきものとや
秋のあらそはあるべきをとよみたるこころ
秋ぞまづふくからねとも山ざとの風ぞ身にしむ
なかねあやかからおくやまのそよ



国譲下
古へ人のこころもふかゝりもの
くるふ
うつゝのほまれあることゝおもふ
ふた葉のなをきくせるひく
よろこぶ
我こゝろをおもふ(本)
まいりこん
ありこそやをあさゝをおくらん(弐本)
民てのこやのこれるかの家のらふをおもひて



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

よみ人しらず　あさ

ゆふぐれはあきのこころもわきかねつ風の音とも虫の音とも

もろ人のつきもてあそぶ秋の夜をひとりながめてあかすころかな

あまのもしほやく煙

きえわびぬ我のみそでしむらん人をすくなみ

ものむすび清らんせぜ

さりくるとせぬこそ

ちとせのもとをみてぞ

ちぐさのちとかこそみてぞ





俊頼二

おのおのおほいまうちぎみ

たるところ古今和歌

ふるさとのさむき

をぬきてのほくとく

うつの

ふるくとをうつむもちものからぬ風

ものおもひけるもろ風の

出ーく

あのひとるもみもちもかこ

母そものこ残ひくろ

物語二上
百番哥合八十九番

おうるふ

おうるふいそやくれぬ古くのあこやの
うちふこもるくれ行としを
ふるさとの春とも
ふるさとの春ともいやちこくよめる

このをとる大和

総角 もろこし物語
かとこてこてこのてもこそぬおくふ
父うちおこくゆくへ
そのおもるる
とくへのうをやくおくの里
りこそもそのふるさえくおくる波のいろそるらむ



そのふるさはのねるふもとの里をとるむそてくるす
まいをとらいやてよめる

つほそ

年ふるさまさきの山人のそわ
井ねもふしくなる思いの
をの井ふさくもとをかくまてこおろて
いろもかへ
をとそのそくぬ山路よおくふ
くちはなくくはるふとりまとりちく
らせのいくふ　女まみのふも度女帝



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

この巻をハくいくさもちてきの清ろんほの男をたのめや
左一本 たちねこふせよいもちてきるくはくるるをのふる日
きこえそそぬきさきまの井心をもつそうくさ
ハ 私家集
さそそふまるふんの巻の井ハらいやるさ清そぬくさ
物語四中 そのおひよおりまくるとのくまるまをのふ
つまかさもそそくそやるくもちををきろんくく
さころもの中文
物語 なくちのとのろれぐさそちくさ清ぬ雪も有ち



雑二

もろこしのそきくさ華陽宮を於をしらく
侍くえのまもと書のめく侍ハ山のけやそち
くよめる 松浦の文の三浅氏忠
物語上 大空の月のこのめくれ神そぬをはい
に一本物語 もろこしようのつをやくんとくる法一の大臣乃
もろふ書もよちくくふ花ふさ月ふむ
すめも契色さのこちおさせをい
くるふ
もまの川の年納言



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

物語一
拾百哥合九八番詞書
同上
そと一本物語於
同哥合九八番
物語二
同哥合三十四番
同上

あさとて
水もらぬ秋も雲のふきふやる月のかそやこゝもと
うの毛一
よるく人〳〵
たゝその月のむかうやとてもかそもそもそ
人のもとふくるまでは法文ふてやくまちつゝ
まつたゝふ月のあてこそ
ふるさとのものもむかし
くなることを家のこゝろていてさくふ文てこゝろる月とまものや
ところまでさゝけるとをゝく
不幻会仁のあま



おくらんそのまゝのまさらなるいうの月をも
まつとてのこむすめあよたのあく侍るも
十三夜の月やくさまあのもてるもとらく
侍るまでをくる

夕さ

宿木
拾百哥合九十番

たゞいの月ふやる我やふまのつよふとてくこゝろあ文うふ
あよまふくこふれまてふる女をゆくくふる
く侍るおまくこ月をふの中約ふ
どふいうる人もあし
ちまよくまやくまある月のふ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

物語三下

百歩哥合七十五番

ワ物語

拾百哥合八番



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

おもふもおろかなりけるすむ月の
　　末葉のちの寄合母　女一本
きのふこそゆうまぐれと称し月
　　なをさのつくふまでわすれをぬるこそ
　　なをさのつくふまでわすれをぬるこそ
すこし別むものの人のおもの丹
うつし毎のこそうつくしまのこと仲
尼むのおほそくすめる月なを
　　堂大
東屋
拾百哥合八十七番
さこの名もむのるふふこと人のおもかそとる孫やの月新



もものくうちふまみのひくろ月いとあのこ
みのおもてもすこ口ろれるふいとおほこいつるを
おほくく
ふひくやうそちのふすむ月のあるまるの新とこと
大和にあ後のくさまをとるくあるふ
　　よみ人しらず
をめもそまとめる月新をるよ神よやこ初むむ
大和ふくつくいろるこ承ま度のおをよまき
のみよ叶こもの中々るこ戸口をこ出るまけるを
かやこのまらいもくいほのこおほめれく



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

有明の別の女院

さるよ春ふくこる月の夢ふ
すまふこるせ給そんこる
こるる月もそるれて
こうそんこるまくおさ給く

宗清

須广 ふるかやいのふるそんこるまくつふ
拾百首哥合十七番 十るなくしゆそふまくこ深
ふたの称ふもるそもかくく深

川霧の界そのあ宇お
月の宇



手習 我のくくる学の界ふめくるも深
百番哥合三十四番 もの白くるろふそのの界納言更衣

こくる

まをそめ月の新ふさそあん深
一のくやを坊よまてをし
一条院の三のうそふこのう
こよりかの院よりふ会
さるもるそ

小野ふまくるろ月のあのくよふかのめく

うそ

我のくくる学の界ふめくるも深ふそんこる月のくやふ
もの白くるろふそのの銅の界納言更衣
こくる
まをそめ月の新ふさそあん深ふほめられるを
一のくやを坊よまてをし
一条院の三のうそふこのうそ
こよりかの院よりふ会
さるもるそ

あさかすぬ淀の底なる
一の淵ふ月入るこそ我もんのやこころまるこそ
めくよみそうかるるこそあのつこそまてあの
こそのふもおくくやかなこそ
法師よるんそそいてるあのつこむすめのこ
ふまろれるふ月のこそふいる我のこくるこそ
あこそのおこころのる
つこもせぬんのやふこそふ月のかこそぬやて

十七ウ六



拾百哥合五十一番

みのこそのふめこそおひこそ月乃
こひも忘ひ出こ秋乃
おも皇太后宮大納言
そこんこそひこそわれこよ有明の月と我よこそ
こ秋のあよまこそいそくる時よこ侍る
風よこまきのこ夫れ
人ふよふもおこひ出こ月よふる秋おこそのそ
出いこ
玉のおまる月のかこよも我ふすもん秋そこまこ
法輪よまこてこ出こあのこそこる

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

をそのぬまの春をまた
有明の月よりさきにみるをうらやまん
春をそむうしとおもひたちにけん
つゆ秋よりもちよりもむるそでも侍りて
いそのかみふるきみちをたづねつつ
中納言むすめをくさきにて入道
うちふまれあしく侍てまうかよをへし乃
女をいろくさ事ども入ことをそせ侍て
ゆきつゑの月の信かな





名よそにくふるもの乃月今あまの戸をさしてやいらん
うつ蝉
月のそら今まの戸をもとめてもいらぬ山のおくの
まいりこん　我うきの
あきくるの風もうらみをまかせてもわる
冷泉院をいてまいりこのちほどなくてもつて
おもひ出ものおほかるころ
春をへの女どものこと
ふるのまもさもしらぬおくやまに
ふりつもるこそまさく

まつを恋ふる　女すゝき

忘れすや夕のそふよるくてもむすひしことを露もこぼれて

山ふところいてゝふ入道のことを伝ふる

まこゝのさすゝ(こゝ)きうりをふほのゝゝふつゝのもち

いつるをとゝやりて　ふもと(十七ノ本)の庵の母

夏ふすむ宿のくもをそれゝてゝ

さうのおくふゝみつゝのゝやおもふゝみとゆる

くゝつゝのそゝたつをとゝ

くゝつゝまつ

こゝろせゝふゝたゝ山ふゝとゝのゝ中ね

言葉とふくふゝまふちつゝのゝそゝ秋ふくゝ

おまのゝほやくゝ山ふゝの事をむくゝとゝゝ

芳ゝうゝゝの字相中ね

神もさてもしほのゝふつゝれくもこゝむゝかの思ひあをや

一条院内大臣の思ひいるゝとゝあそのふる日

はゝとゝけるゝ　いそてゝのふの華に

ほゝて思ふゝおゝれゝ名れゝの雨ふも社のゝを私やせぬ

志のむく女のもとにまゝれゝをゝくいむく

うゝふもいもゝてゝさゝわゝるほゝふ雨やゝ事を

ゝゝゝゝとゝふまのそゝつゝふゝく



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

東屋

さしともむしやいかきやなにまもるまやなれまさ
百番哥合七十七番
小山よおもほしわくるかふあのつこふせん
ほのくらくよつきくまこのおとうや
むさまあひくふ　六条地神子
若紫
次やまふこおろつまさめて須もよふ
百番哥合七十番
たたねよりまやまのおとをや
なくもふ公ほそくふおほえて侍ふ
風よ里おさの抽まえ納言
天ふこかるあふのくふのまふ夢ふそつて





この面

なのふさくよりおあふ当ふてまこふく抱そのふりまくる
御出家おほめ申ふ世給くるこころ空入ふ雲
白のもこふくふ称のまつせをこころをゆく
おなし
山ふのくやくふるくふ松の風ふくふ多ふむ
たたねた月山よまこふくふるこころ松のこふをふく
風のおとのこみとまあも
こふ
まこふ人のこふぬ山人の松をふこふ
山ふこそゆるの尚侍

かつなるところよりまこと松風のおそろ
しくゆきてまこと　いちめんぬるまの中納言の御子女
よとちかくさしもぬなく小松ともなる
をしほやいかごろつまこと侍るころ
なるとの中納言の女
むすこ侍らんよりはこうせもんをと
おもねふくつくまひるるところふかくもまるさせ給
さんるもちうなくなりよう侍のあまおりまして
清なのむすめよりさまやの中文
くとうや





まるもそてうさふかくんよりの山ふ松風ふきふ忘れて
きのむさるをとこ乃いるるをふっ
よみ侍る　　称さ
学のもふかるもつさまるの多のさて也き風のおとい
太太和泉ふ流よりてまるてふ侍くてくふ
まするふもやまこ
同女三の御子の中納言
あくふあさちまの旦那のさまこと女ともつの忘れん
　　拾百哥合十三番
うつ西一
　　同哥合十四番
西さちふあくまこと女ともつの忘れん
ふのおらとそよつよ



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

須戸

松浦宮の華陽玉

いふものさふてこゝをのつよ我ちゝはゝしら
ぬの御かたよ春宮の御笛のうるはしきこと
おりろきふをのくもきゝかちの月の光をち
て樂のこゑおかしきをあそせ給へるふえの女七人
女ぜ御むすめをむきすまさせ給へるふえの女七人
をのゝもよわおもてく一返ちひくふ春玄を
とめこゑの一えうとめおそまの学ものうるふ
もせんとふせるつふえうへぬよやなのうつら
一ふきをうくく女ぜの御神のうつよまるて



有明の別のあまをゝめ
この笛よいとゝめんとなをむ
御つの返
女ぜ
花のかへこれぬ神よとゝめおそ打ぬ
一条ぜまく女ぜ月大臣ぬ
ひるひるふ笛ふまふとせうひおあて
いそてしの菜白
高よかなふ秋のうへの松の風月をもせいよふやゝめむ
八月十日花ととをふくへ
むまをもちくへくるて思いそゝをて



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

物語一
拾百哥合一番

秋きぬと人はいふなり
しかすがに
風の音にぞ
おどろかれぬる

右一本

秋の夜の
月の光し
清ければ
くもりなしとも
見ゆる
雲かな

同哥合九十一番

左大臣春日ふまうで
の
時
人人
おほく
つどへる
所にて
よめる

春日野は
けふやまつらむ
紫の
雲のごとく
人の
つどへる

右一本

雲のうへを
見つるまでこそ
なかりしか
今は
下人の
ところせくも
ある





梅花笠

めづらしく
風のたよりの
ことの葉を
花にぞ
ふるき
心
知らるる

うぐひすの
こゑ
聞くときは
春
ごとに
花の
笠
ぬぐ
ここち
こそ
すれ

おやこの中の
歌
人人
おほく
つどへて
歌
よみ
侍りけるに
よめる

おもふこと
いはしの
ほるる
ものなれば
袖
ぬれぬ
ほどの
涙
なりけり

世をそむく
ものとは
なしに
墨染の
袖
ぬれぬ
ほどの
涙
なりけり

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

風雲集 巻十八

雑三

仁和の寺にて

おほいまうちきみ

女のすゝめによりて

せきり川のたえぬるれよまつ

清のつら

たゝ

せきり川の古きを折をりてもちせのほとりをつくる

入道おほいまうちきみの家より酒あり

きうつゝせのふるてよませたる





大ゐ川みなそこの石よりおひいでゝ

冷泉院より菊おまゐらせたまふとて

海波ましくおふく山

ふる後の年ねすゝくも

いひつゝそふる 二つの

まつもふのもゝ松を

この君に幼ふのうちて

法もふえのうゝ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2

ガラス使用

六大ねんごろの家柄の宮ばらなれば
ふむつきもむせるさくらの木のもとに乃
うつろふ花おほくちりしきたるを
よものせばくる　うつりのさまの俤浄
樓上下
春さめに我袖ぬれてさくら花
おほくちりぬよつゝまの川
一ぢ孫の松も木ざくらかな八
同上
うぐひすの谷の松ばやしより春の
はつねをとさうの笛にうつりあれのこせばくこの岡



返すふもと民戸ふもさ
まもまもせる
さ大臣招一本ほとゝぎすまつ夜半相
くねこうの中ちりのこるをとよめる
おほ一ぢ
菊宴
浦ごろみちむくそむる浦の松
いそのこの年幼き子ども
住そかさちふるもぬこ
まんくて　かくやむめ
物語
年をこふこゝろよりぬ住のえの

ものむくすみよし
くく　住よし
物語　るぬてさくもおさきの住のはよまき
冥白小方しのむくみくく
うちふくよめる　おふしあま
同上　住よしのあよともてはすさくうく
あさあふくまてきくくるる
ーたふる狗舟よあまのまくふをくちおさ
くるをとくく右サねちのよりまいろさーよかハ
うーくらむのしいひまとを



吹上上
くるくのふちくふもまの中納言すー
おふまひくこつふんあまのたくふを
てーくおちち住とくふぬさ
この秋のいさ入くふ
紀伊
同上　天うねちよくおさあのさま
くもおく出住のむろよやよすくる
ころよめる　すまひのすみ社亮
世よいさるかひもろぬふおこ社のぬるん

この巻一　内記のこと
あくいそをこつてすくさいおのつくしい
きのくにの女のさまく〳〵くるるやうに
かまあひくさをかくるとそてもあまる
こまゐのくちおしのかしらくるこころふ
人くつとひこころくく見合しまつもの
まけるんすとをさをさもまつもの
まれもあくいひくる
このあいせの蔵人なる



このひかことおよなくくらんは法も天うかくよいこころよせてん
私のくこのお合よくあ
待くるを狂言綺語のまやまちむるへ（リ一本）
まくやとい待く

西の海乃あま
こつそくすもふむあさるあまくいせもひもよこ
まのくらふたもつそくこもくこつるこころ小花波乃
女市そまのくくこのを大原

女さくこの

あくのくこあさの涙くる法くめんかく



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

やまふきとつゝじとうつろひくるふ海のおもて
こゝろほそくちりさくら舟ともものこゝろ〳〵也
うのそらに
あるひもおきちよみするうきふねの下ふこゝろをいたにとん
冥に入をた改たる舟のおもてに
ふそのおとゝをそやうんをつゝくるを
らくゆくこゝをとゝめ侍る宇治
物語 拾百哥合立番
称さめの女院新かね
物語 うんれ
いこゝさゝものふくあものいそやよ侍るこゝろまものの



むさゝ〳〵こゝろくるふちちひさゝ舟をこの称よ
あしんとこゝやかく いそ
ふこゝまつゝこゝるあま舟をまもちそれ称ぬまつて
なのふそやわふくんあひくる人の宿をとゝまちかた
くまそよある
新古今雑下 朗詠遊女
ほのよひるふこゝろ世をつゝてものこゝれ宿も定めす
むすめの女御をたねふ名こゝろくさまくく侍ら
くるふお代のく称させ侍ら也度女御や
すこゝろこゝくたねのもとふつくる
女すみの月大尽



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2

ガラス使用

浮舟
拾百哥合三十五番

手習
百首哥合九十番

身となく淚の川のまくやせよ と物語百
小舟のあまとつをくさるふら
うこのこともひつ事らはくほし

同上
拾百哥合六十五番

もろかくせよふるいのこと
一のむてあくまるるけるこちよかよ
なるをこのもにたつとなるものふおひくこと
法々る ほ百添大納言の女
弱ぬこみのひくほくもらねをふこやつほし
父御をいこよおもつおこるへ侍るこうつうち



よりいてるこちふくの私そ申いこの南乃山
ふこいひもるをこも
いつこともぬもこゆをほもひひ今ん山のゆくるを
せちよひくる女よまろよもあひてこちち
けをいをそむんていこちよわく
ひまをの事ん おもひいる山ちよのうけ業我
ほいくのちおるし人のうふおをる
衣もひおせよ山よ許さぬ共

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

物語
拾百哥合十九番

物語四

ふるさとふのるさやうるのふるさと
蜀山とりよもとおもてなるこう日本
の中納言まつ孫まるとくるふ
おおしまの陽縣后
同一
拾百番合元四番
そのうちふもとて入ふよのたつるこうん
藤原君
もつまるてつまとなきる女のもふつるる
うちとうへ入とおろれも海
をとのれんとおもひくるそよくよめる



ひとふとうへ入る山をふさるこもの八海なるこう
さるまつ神の原やもとりぬらぬのそせくの
をここのの松くふこそ八まふのこ孫のぬ
もとふりるて市るさとのこよるこう
扇ふうの深井納言女
ういおものふるよ入めもあるやと詠とふさ
大和くのそれるさやふまつをくる松八ほうす
うつろいよ無極の小のおともうる生八



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

むそ
伊勢やそのやその女院
伊勢やそのやその女院
母よそ〳〵文おそのやその女院
のそよかそてそらの日うれぬかそのみも好さそめ
る　源氏のお物方
物語三下
百歩哥合七十七番
槙柱
なそ〳〵のむ老のもそのまそ
ふみふみそるにのもそらよかそつそる
おのひそる
ときそふそ〳〵そけるこころもほそ〳〵うけ

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

山さとのふるき物がたりなどしてみしよのことどもうちいでつるもあはれなり

ひとのほうふをきくにつけてもおもひやるこころのやみのいとゞ

あさちのをのゝしのはらしげゝれどいにしへ人のかげぞ恋しき

我よりはいとゞのむしろよ物がたりせんと云ふ

山寺はいもとゝ女のもゝふねのそらなる

やどりさだめぬ

ふるさとをいでゝ

ふるさとをいでゝよりこのほどのことなどかたりあはせむとおもひつるを

世をのがれてはまつよりあはれはしらじとよめる

ふせごやをのがさまざまつれづれのなぐさめにもとおもひたつ

うきをしるぬの字おもひ

凡例

ふるさとのつゝきものゝほとゝぎすこゑのうけもち

ふるさとを待らむ

中吉

くいかにて入んそのみちふもとやおくまさるらん

まいり人　物さめのもろさその後

世の中ふまことさのまさわりいかゞ我為すらん

朱雀院よりおほせをうけたまはりて

さぜるこゝろ　源氏二月朔日

横笛

ふさぜよおもひのゆくこゝろむすぼゝれてそこはかとなくものそさぜるる

宇治八の宮よりつのそさぜおこせたるに



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』 請求記号 117-2
ガラス使用

117
105
2

# 丹鶴城藏梓

賣弘所
三都書肆

京都三条通升屋町　出雲寺文次郎
大阪心齋橋通久太郎町　河内屋喜兵衛
江戸芝神明前　岡田屋嘉七
同鍛冶橋五郎兵衛町　中屋徳兵衛



右風葉和哥集以三本對校了



国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』　請求記号 117-2
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『丹鶴叢書』請求記号 117-2

ガラス使用